

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 8 日現在

機関番号：37406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730715

研究課題名(和文)フィンランドにおける乳児期からの多文化保育モデルの研究

研究課題名(英文)Study of the Finnish Multi-Cultural Child Care Starting from Infant Days

研究代表者

三井 真紀(Mitsui, Maki)

九州ルーテル学院大学・人文学部・講師

研究者番号：80342252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、フィンランドの保育現場のフィールドワークを通して、乳幼児をとりまく多文化保育の現状と課題を多角的な視点から分析することである。

特に、フィンランドの保育所等で実践されている、0歳から活用可能な多文化保育プログラムに着目しながら、新しい北欧型多文化保育モデルについて検討し、多文化状況下における「乳児期からの多文化保育」の意義について、日本の多文化保育実践の可能性とあわせて考察した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to analyze the present status and the problems of multi-cultural child care through the field work at the Finnish child care sites and from the multiple theoretical view points.

This study specially focused on the new North European model of multi-cultural child care utilized from the first year of life at Finnish child care sites. The meaning of the “ multi-cultural child care from infant days ” in relation to the possibilities of that of Japanese model in the multi-cultural society was then discussed.

研究分野：保育社会学

キーワード：多文化保育 フィンランド 乳幼児 保育モデル 移民 難民 保育 保育空間

1. 研究開始当初の背景

- (1) 多文化保育研究における過去の研究蓄積には乳幼児期にフォーカスした研究実績に課題が残る。
- (2) 文化獲得が生後まもなく始まる背景を鑑み、発達段階に即した0歳から活用可能なプログラムの開発と成果の分析が緊急課題として求められる。
- (3) 乳幼児期から多文化共生教育について取り組むフィンランドの実践と文化的背景を読み解くことは、従来の北欧型保育モデルとは別の保育モデルを提案できる可能性がある。
- (4) 0歳からスタートする多文化保育研究の成果は、フィンランド国内外の同様の環境におかれた保育現場にとって有効に機能する可能性を持つと考えられる。
- (5) フィンランドの保育現場について、従来の研究は短期視察の報告が中心となっており、丁寧な洞察には課題が残る。また、15歳以上を対象とした学力に関する研究は盛んであるが、保育に特化した報告は数少ない。長期的な見通しをもつフィールドワークの必要性が考えられる。

2. 研究の目的

- (1) フィンランドの乳幼児をとりまく多文化保育の現状と課題を、現地の保育所(パイヴァコティ)を中心とした保育空間を通して分析し明らかにすること。
- (2) フィンランド社会における保育文化の位置づけを検証するとともに、実践プログラムの有効性について社会学的視座から考察すること。
- (3) 従来の北欧型多文化保育モデルにはないフィンランド・モデルと呼べるユニークな保育モデルの模索が可能であるか検討すること。

3. 研究の方法

- (1) 多文化保育研究に関する研究成果を整理し、各方面における課題を明確にする。
- (2) フィンランドの保育制度や行政課題を明らかにしながら、保育現場における最新かつ一定の情報を入手し整理する。

- (3) ヘルシンキ市内を中心にフィールドワークを実施する。特に、継続的な保育現場での参与観察と保育者・保護者・為政者へのインタビューをおこない、フィンランド社会からみたフィンランドの保育文化の構造を検証する。

4. 研究成果

- (1) 多文化保育研究が世界で増加傾向にある一方、0歳からスタートすることを視野に入れた研究が極端に少ないことが明らかになった。
- (2) 本研究継続の必要性について確認できるとともに、共同研究の必要性について十分議論し、各国研究者と情報交換がスタートした。
- (3) フィンランドには、ヘルシンキ大学が主体となって取り組む多文化保育プログラムが存在し、乳幼児期からの家族支援サービスとして有用に機能していた。
- (4) 研究代表者らとの懇談からは、新しい課題としてアジア諸国からの移民の流れを受けた文化間格差の問題があげられた。
- (5) フィンランド社会の移民・難民は増加傾向にあり、社会全体として制度が整うまでに時間を要していることが明らかになった。
- (6) 現地の保育・教育に従事する現場保育者の負担が重い。速やかな移民の子どもを対象にした、保育プログラム開発に期待がかかる。
- (7) 2013年に保育所の管轄が「社会福祉省」から「教育文化省」に移行したことを受け、近年中の大幅な保育カリキュラムの改訂を視野に入れたプログラムの調整も必要であり、それに伴い保育現場の移民支援策への対応が検討されることが明らかになった。
- (8) フィールドワークを通して、新しい家族支援策の必要性が明らかになった。特に、アジアや中東文化に精通しながら保育実践ができる保育空間を作ることが課題である。
- (9) 移民の子どもへの課題は、個々の問題解決とは切り離し、当事者主体の移民・難民への家族支援議策が必要不可欠である。

- (10)有効な手段として、当事者同士でワークショップ（勉強会）や座談会を開く等、課題を持ち寄り検討する機会を設定することが提案できた。特に、フィンランドでは住民の声が政治に反映されやすいため、継続的な活動が重要であろう。



写真1．研究期間中実施したアジア移民の交流会（於：フィンランド）

- (11)当事者主体の活動の支えとなるのは、アジアや中東文化にも精通した研究者を含む専門家集団であることが推測できた。
- (12)研究交流や定期的な育成・情報交換の場が必要であることが改めて確認された。
- (13)今後、現地で移民として生活している当事者が研究活動に加わったり、教師になったりしながら課題解決の方向性を探ることに期待が向けられている。北欧各国との情報交換や共同研究を視野に入れながら今後の研究を展開する必要性が考えられた。



写真2．研究期間中参加した専門家集団研究会（於：ヘルシンキ大学）

- (14)フィンランドの保育環境の分析により、スウェーデンに代表される従来の北欧型保育や多文化教育・保育環境の傾向とは異なる可能性が高いことが明らかになった。新しい保育モデルの提案により、国内外の研究および保育実践に与える効果が期待される。

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

三井真紀、フィンランドにおける多文化保育と家族支援の研究、日本比較文化学会関東支部研究例会、2015年3月14日、東京未来大学（東京都・足立区）

Maki Mitsui, Study of the identity structure of the child with Japanese culture in Finland, EARLI SIG19 Conference 2014 (Religious and Spiritual Education in Helsinki), Helsinki(finland)

〔図書〕(計 2 件)

三井真紀、咲間まり子、堀田正央、石焼玲、佐藤千瀬、林悠子 他8名、みらい、多文化保育・教育論、2014

三井真紀、中村友紀、他21名、開文社出版、比較文化の地平を拓く、2014

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三井真紀 (MITSUI, Maki)

九州ルーテル学院大学・人文学部・講師

研究者番号：80342252